



風前花

特別
5112
4



風
前
花

風前花

40-9029



風前花

月中子作

曲中の人名

小山金久

佐山候の舊臣

静子

故佐山候の侍妾

定子

金久の妻

八童子

候の子静子の腹

春年

秋夫

金久の子

童久

山村半藏

無職小山家へ出入の者

原 太郎 潜り代言
千葉光之 若紳士

小山家の下女

六 助 大工棟梁

仙 吉 千葉氏別荘の留守人

梅 次郎 合 園丁

三 吉 小山家抱車夫

五 兵衛 合 門番

序幕

東京麻布佐山卸奥座敷の場

主人 金久 山村半藏

金 久は又か、馴染み其方に却て疑はるる知り
な、今言ひ改事、此身がまうらあぬ、二つ二つ
大事なる事、其心一肩介てりやれ。
半 保険附の金運に、念と入れな、様は御身分
に、一日な、あつからば、は、大分酔
して、あつから、然、兼、御息に預、山村半藏
私が頼まれ、酔は、彼の鐘の音と同様、

此中より可也の
方流の思を

思利にまかりからせ

煙ハリウ〜仕上げ
も見よ〜

ごーんと鳴らり鳴らり切り、一寸と後と思ふが、
憚らざる平聲の氣性、江戸の子と習ひてはたし。
是非其方がなれと思ひて言ひて除けし、唯其
處に目々あれはこそ。はて其一言で酒の旨なりし、
拙者が毛深い酌で、氣に合ふが、今日の子を採り
て、さあ充分に過してん。何れ諸の事首尾より行
りば、旨い月日に晴れ〜と酒を飲せら。其れ其方
が今一言、よりの聲をまゐらぬ。
半 男利に盡きたる。何れと御らんぞ唯、今より此
半瘋とが、ちと、坊主の癡器と思召す。受合よよ
よ一言の、鑰を、其上と思ひ、事と為事と、
ちやん〜と諸子づゝ、上の上と其は上、

智者、借りろからを
聞えちれい相を
かり〜

半瘋、いんや、
江戸の思を、
さじちらう〜

おんことお買下れませ。
金 売と又、今くら何々調子の高は、高い〜音が高い。
若〜お人に聞え〜もななり、あ、あれ、今鳴ら〜成程十
時。えれがや明日午前に此度原と〜のきよと、又相談
と借らせませ〜。 ひときと叩〜
金 御用でござりませら。
金 車と用意〜。〜、半瘋さん酔して長〜なり、
其積り〜申せ。
半 御馳まの上御車と〜、先日迄にはい、い、今日に御き〜お取
扱、必も骨〜折り〜
金 分〜。早〜送ら申せ。

糸はい

「時儀と一鼻歌謡して半藏も糸のしほりもい
ま。

金糸

糸はい

金 静の八重は何をして居る。

金 由居間下且却様の由款懐とよ待受けでござりませぬ。

金 一も早く其れ半藏と。

「糸まよひ

金 静の静よと時めきしなり、如何もばとてよよ半藏

如き奴がに、我れも頭を下せしき、時世と共に開行
く、此身の運を頼めしき。天晴神とてさいて、何

此新の巻の何

馬鹿遊ばせ

恥ぢゆる此身もば、親代々の相傳せりて、一月の煙
草の代に更りしとぬ、微録の紙に懸きし、昔と思
ふは袈裟の喻、彼殿様の側近へ、三つ重の襦袢、
見て見ぬ風、静が身に、最早苦難の來も時分、
如何も、悪魔の籠來ぬらむ。之と思はれ我れも事
の、彼れが、洪水に、一盃の水と注ぐ均しく、何れ悪事
とさはれど、馬鹿殿様と持前の、馬鹿遊ばせ、馬
鹿静の、家宅地前、金糸の添へたる物と、婿君の我
れ遣はせし、何れ後指と半藏もやらん。若しあな我
智慧才賢と称めば、誰れ者ともあらざらん。今此
時計の「一冊廻りも頃よ、東京紳士殿中に、小山金久
の名、時めきの音高く、白ふと腹中、遠流の、風

此所のまじまつり
集りて
あはれ

と憂かりぬ。次第。

走 其れは合せておぼんも。人々皆妻と目どやうにあせうのお
心仕せらばのちのち、片時ともあせうの妻がうらむお傍
に居るとだててまよまよいものなり。

金 傍に居いぬ。そんなららと傍へ寄つた。

走 お腹の胎兒が泣きまわす。大事だぞうまをぬる。

金 其方と身重の事なれば、起居の息苦からうと思ふ。明日
もよ余みけりの者來やうに、慶庵へ言ひて半
藏に頼む。又彼の番と当分置かうにたれば、朝寐
も充分にできやうぞ。

走 して明日と、由役所へ。

金 辞職まじり置はれぬ。無届は勿論行くぬせや。

ぬが、斯く事なれば、聞かぬ。其方と見ふ我が情
愛と思はれよ。

走 そんな何故ぞいふ。

金 早へ寝所へ立行き、燈の火口と見れば、其方へ好きは
七福神、我家に宿し瑞兆あらう。久しく持て満月の
弓と回し、喜悅の情を、控へたは尻を、進ら彼
かの嬉し涙の垣とも置きたるぞや。

走 何とおつやつて、やう分りませぬぞ、暗着の一枚でまよ
迷がげな。かたよ床と延びてからうと、解して見ま
よ。

金 其方行くなら、静に矢をいとおふてくれよ。

同二 同即静于居間の場

静子 八重子

静

如何に重久のせんばとて、朝から夜中迄少しも休まほに、さう
精進はせり又如何の病氣起りませぬと心配せらるぬ。さ
あ〜大抵の不言を私に存せ、目も味も

八は母様おそふ目が悪いに、さうお裁縫お止め遊ばせ、これ
濟み次第おき傳申しませねば。私に此の位な事、何
んか、好きに事なすよなりませぬ。

静

いえ〜そんな心遣と度々おしなせな。かう年暮れ
は頭よき敏とちやな壁積寄りの、針の通ひよげ
と感なむが、其ばかり何時迄も疲れぬ、無理〜と

感なむ、さう〜い其方の年暮はさうなれぬ。

まあ〜彼等の小言は此の目の皆譲つて。八重や。

八

お裁縫と違ひさうも楽なごりませぬ、其れに重久さん
にさう〜寒むさら待焦れて、さう谷子、其身に成れぬ
感然下徹夜で〜はなせりませぬ。

静

何と言遣らう。其方が春の倍と二倍と重着し、わ
身へ、内より寒風吹せさうは格別、何人の凌かれぬと
いふらうぞ。悠と空〜といふ際限つらぬげは、言遣ら
通り親と子に子と孫に、さうも悠張共の續くよとよ。

なふし重。あの庭でい赤子の時と、其方達と少〜と

変りなら、此の影だに見れば泣声も止み、た。ほんに

蛙の子と人の子と形づつりの氣性、変れば夢も

春の日和のらうらうと、晴れ渡りし中空に、花の便り
大和の吉野初瀬の氷盛、見下らばがの甚君海人、
女波男波の戯れ、甚しき鳴らま物の音に、うっ
らうと睡りて、世を忘れて、厨所事々、人ごと忘れて
——さういふは。

前想ふところ、空虚な、其景色に、成程。其れに付けた
其方と産むたけ、おきき、妻はけり、續り、お
に此度の、お産に免れ、殿様に、或つれ、こいつ
とら、お吐の受や、おとあり、が、此家に来て、其方
大さけ、これ、其疑と暗れけ、が、暗れぬを不思議な
の壽命、免れ、と思ひ、此身より、よとつと思つ、殿様
が、おえち、給ひ、此世を、朝より、眠れ、まよふと、

と、か、諦めの、お執り、ハ、下、地獄に、誘行、悪鬼
め、漸に、七瀬八瀬の、苦、して、此胸の中より、追遣れ
り、と思ふ、が、早、此度、秋、夫、重、久、の、姿、して、燃
心、始、煙、に、哽、ぐ、本、の、お、定、の、姿、お、八、重、お、ま、ん、
と、申、入、と、思、ひ、折、と、得、で、今、に、秘、お、く、事、あ、
今、宵、お、次、室、に、入、も、居、ら、ば、春、ま、と、又、帰、ら、ぬ、間、も、程
に、能、く、一、聽、い、て、此、身、が、差、し、右、さ、と、其、方、の、胸
に、扣、が、あ、ら、ば、記、一、番、下、た、れ。あ、の、金、久、と、お、定、の、夫、婦
と、あ、ら、ば、元、と、お、は、お、家、の、御、法、度、密、通、——其、方
お、は、驚、き、て、——殿、様、御、遊、び、の、前、より、お、せ、し、中、と、あ
り、つ、ら、ん、が、由、病、氣、中、ら、日、頃、の、御、思、い、一、際、に、重、き、が、心、の
押、さ、り、暫、に、お、杖、場、と、遊、れ、ら、ぬ、隙、と、二人、に、

富成程、お年が鳴海の尾張の熱田。そのぢうにお病な
「富成程」

春 姉様。

ハ はい。

春 兄様が伺ふ御用でございます。

ハ 五女を先から聞きよと思つて居る。

春 姉様お淋いございませぬ。

ハ 何故。

春 (独語) あ、今頃お母様お心やぞんじらう。若さま
側離れたら、誰かたらば此身に振かりぬ。別腹の
小言、今より母上と姉君のお袖と濡らさむ。思は思
不程、行きなさい。いつそ先にお謝絶申さばよ。

ハ 其うち今宵学校でございます。風邪でございます。大層
顔色が悪いが。

春 (独語) おんな所が、氣楽相は假面を被り、おわいなき
人々に入り、温き愛はつり、語り居らむ。いつそま
学問を止め、同じくは濡らさむ。母の姉君、ひとつ樹
蔭に隠れん。

ハ 春さん、此寶丹お殿、お血氣が悪いから、早く。

春 姉様、明日からお慶と離れよう。

ハ 何、誰が。

春 宝宿、お言ひなす。お言ひなす。お言ひなす。
ハ 寄宿。あ、それ、そんなら由勉強に都合がよいな。

今迄の春年八十歳正下の
男子のおはけ

春
景
影
おん
の

此度お鳥と思ふて、只様がさうなされたせう。一日も早
く其心にて字問へて下されよ。然し其心よき一射
え、もつ殿まじ下好し。

春有難くおびりませう。

八明日と早いよ。さう。そんなら持つて行く物と持て
おびりませう。

「八重子泣き」をま。

春かゝる霞もき姿、心ゆく人さき果て此下夏の人
かゝる、お妙君がさう。若し書きてお宿縁と、かゝる
あやうく、賤く、穢れき許に落ちしと、下り玉て天
人さうな、おれ妙君が三五夜中、鬼影精を騰が、桂
華耀と吐くと仰見て、泣き給はさうの母きを悲し
まむ。若し天の羽衣を失ひなむと、おれ海狗

に哀願をきて止むべきや。若し妙君が毒矢番
く荒夷の前に現はれ給はさう、假令朝まきより猶り
暮る、儘に見せし一頭の獲物に心焦燥つ時と金、張
詩の、さう矢と捨て、手と番、無量の慈悲と施さ
むた。さうて、お又上夫婦、我等親中、空を翔る力
思ひ給はさう。然し、妙君の春まは、お花咲く春に逢
ひ、さうなく、空に漂ふ香も、さうめ。なんぞお妙君に
—— 噴きおびり、羅蓋を、飛車に、若しお妙君が
果り結はしませ、天の羽衣浦風に打ゆつ、翩翩と、棚
引く霞に入り給はしませ。—— 女様を素より妙君のめん、
唯一人後に残はしませ此身はさう。およお妙君、何人
とよ、誰と何を語りませ、思ひ、夏野行く、牡鹿

静子入来。

静 子も待つて居らう、睡眠むらう。

八 お姉様、春を人の明日の奇蹟をいふ由、御同様に御
勉強に御好い事と、進んで存じらる。

春 二里の二里より私を御へおかしは

静 其うさういふ御の今も其詩。も春の昔むらうと
勉強も私を御へおかしは下れらう。おかしは御へ
おかしは御へおかしは。

一幕

第二幕

原太郎住家入場

小山金久と玄間口と主人原太郎、山村

半藏貝送り居る侍。

金 いや恐入ります、然らば御主人、御初御面を顧みませ
〜御面を顧み、何れも早や。いふ法律上の事を替
同様に拙者、何事〜此後共にくれ〜今二件に付、
御配慮の程と願ひます。

太 いや其れは拙者が専門。それなら道徳の事、讀み落し、
此度明日申吉左右御返御致しませぬ、由をい下す。
金 いや此上も。何れも改めておれに罷ませませぬ。然らば

山村 此上も、今も色〜御配慮の厚く存じます。
半 左様せらば小山、且即、今晩〜此度の話、御次第、

先づ
お知らせて申す所でございます。

左 何分まで原は、更めて公願申すまで。

「と挨拶して金久帰る、太郎半
藏奥へ引返した。

半 何人とも原は、挨拶が申す通り、念の入り人ごとであつたよ
せぬ。

太 念入る、癖に抜目も、女前素人にも勝ちな事。毎
分、如く毎日、五十人百人と、素人相きの多岐な事、
少くも感づか致すまぬ。

半 は、……五十人百人と、其れは夜見せの植木屋の方でござ
らぬ。

太 今日と皆謝絶してあつても、如何せ、證據下何と

車馬に、自分の名書と書きたる公言致すまぬ。
自分と書かふとの中では、なれば、五十の百が儲あり、是れが
一つの訴訟ものなり。に御座下、山村氏。然し訴訟
せられぬ、残念な事、何人とも半藏殿、其代り、松
原の料理代、自誤願下とてや、右の車代、
被書の負担。

半 さあ、……手も叩く待た給ふ。……は、昨日小山が車馬とて
貰ひ、……座敷も、……之れ、何う買つて貰ふか、此處と松
原と、二件が前後と、……やせいろ。何に酒盃の器具が
揃つては、……は、……根が現れて来ぬ、
あ。

太 い、松原の……有る即し……

に扇は、簪を持て来た。我らも、九十九夜と通ふ
度に取り盡さざれば、虫何れ半摘と受ぬ海。
千草を、お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

定
はい。

定は、お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

此家には、何れも、

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お前の箱に入れて来た。

お家に入らうと申されば、秋様の重様のお母さま
下へ。

重様のお母さま。

秋は、僕も本讀はうと申されば、お母さま。

春は、僕も本讀はうと申されば、お母さま。

重様のお母さま、重様のお母さま、お母さま。

お前が馬に上りて、馳つて廻りなれやうと申されば、
お母さま。

秋は、僕も本讀はうと申されば、お母さま。高の太殿と申す
竹刀で、殿下へ。

重様のお母さま、重様のお母さま、お母さま。重様のお母さま、
罪と作らまへ。

叙文

此句調は、徒母を、
と、い、め、ら、ぬ、り、

秋は、僕も本讀はうと申されば、お母さま。高の太殿と申す
竹刀で、殿下へ。

重様のお母さま、重様のお母さま、お母さま。重様のお母さま、
罪と作らまへ。

春は、僕も本讀はうと申されば、お母さま。高の太殿と申す
竹刀で、殿下へ。

重様のお母さま、重様のお母さま、お母さま。重様のお母さま、
罪と作らまへ。

春は、僕も本讀はうと申されば、お母さま。高の太殿と申す
竹刀で、殿下へ。

重様のお母さま、重様のお母さま、お母さま。重様のお母さま、
罪と作らまへ。

重いよ〜お父様が〜の〜
持持〜の〜
はよ〜

「この世には春も秋も其口を掩い。」

春 六〜はいぢや又私がはれた。秋は人お前足から〜
勘辨〜とちやう。

秋 兄がから弟より先き好い方を撰ぶが其れが悪い、悪
けぢやあれで行〜

「又お父様持来の書よ」

春 あ〜ふらふら〜い重ちやん。それぢやはうがせい取つてあげ〜
から黙り。

「箱を取〜やい。」

秋 さあ明い〜重ちやん〜に〜。〜
△届久入来〜

春 あり重ちやん〜散らか〜

金 重、六何よ〜か。

重 繪と〜

金 何んが〜大切の書類を明けて。よ〜お〜

「〜書よ〜お〜重〜わ〜は〜」

誰が〜と〜ふた。

重 兄さん〜。

金 何に秋が。

「〜書よ〜」

秋 お伯さん〜お〜。お伯さん〜。

「〜秋夫〜け〜ら〜は〜」

金 春、手前小供に言付〜何〜か〜。

金を何位の要處
う余ハイアゴ一此
咄小兎の喧嘩を飛出す
人物と又水がどどど

春 重あつ人が其中に繪があらうて聞きよせんから取つてつらふでも。

春 繪。嘘と言ふ。手前あつ財

春 嘘でもりよせん。

春 何に此嘘つすめ、少人な所に繪がはつてらんか。

「と竹刀を以て打つ。

静子、八重子、定子、言、女、草入來り。

「静子春まふ打つと見るとより飛んで居久の手に

繪。

構ふ。何に此嘘つすめ、又何り言ふら。

「と強く打つ、おれた春ま僵れ静子あつと絶えら。

お腹な男の
作れ生既い
り

以上のことろを金久
ハ最し香齋から入るが
加一「ま愛護とよま
り極く小胆な男が
如「此金久の
静子春まふ其此徒吹
なるさふ唯表面を
かりてなく内にも成ル
怖ぢて一も批批する勇氣
加「春年ハ春年 主筋
が小ハ春年酒のもの存小ハ
金久の毒樽と女の四復
と謀りするやかきう春年
之となすやななく却つて
母姉の傍に居て宿を
するを許さくおまふ
純淨ハ世に居るや
いんちん
おまふ
作者ハ春華の
をこゝに鳴出らるる

春 あれ即隱居様だが、奥様おれ。

春 人の大切の書類と見てかきまゝ氣。盗人。此賊鬼

春 等に其夥伴に。

春 あつてもよよ遊ばせ。おれ喧嘩の泣きでい、一

春 体ごとくんで。

春 盗人共に構ふな。おれ自來い。何に静が、その病で

春 あり、抛棄つておけ。

「とさし捨て、金久奥へ。

春 お母様。嘔動い來。菊屋の水と、さし

春 もらと吹掛けた。おれ言何故燃然して居らんぞ。早

春 く春年と介拍してよ。

春 奥で手が鳴らうから、私行とから、女が前を見

金 何人か。

半 いふ決心はなした。

金 子巻(一)行くなり

半 矢張りまた。かお嬢様は此事即得心でいらつてやります。

金 彼奴の切辞の固まり不得心と云ふに極つて事、十は九世

者後見人であらう以上、得心不得心と勿論我の権

内に在れば、假令静ればこそ一言とせばはよぬ苦。

半 さうおつておれど、此事づりりと親兄弟をさふさふなく

神や佛をも強入れの規則と、神代人初より自然と定

木として裁されしもの。万一由当人由不承知もなば、さうな

さう由所在でございませう。

金 勿論、無理なりに行く時々、嚇つて賺つて得心させし。

総じてオオの心と世に流行の早染とも、甚く変化有り
易いものぞございな、心配するに及ばぬ事。

半 其のお請合のお言葉も後指に、そんがら「互」の

敵に當つて見せしめ。

金 ちんがの此度頼入しぞ。

半 後知致しませう。

金 首尾よきよと、其骨折と後よりせませう。

半 一層りりと此身に重き枷を、腰を美と、其平即免し

金 何んぞ。

半 いや、ま細承知でございませう。

金 然らばお暇仕らんが、如何に山村氏。古今此身はり
が我が入品に似合ふやうに、追舟其許しに似合ふやう

来びきた、何時迄も独身で斯く住居に。然し其れに
丹ては妻の業で相談せし事もあるが、何れ又。そん
れらよぐでお別れ申す。

「幕」

第六幕

小山邸の場

重久 秋夫 重久が 菊
重久、狂氣の御祖母さんへ来すよ。
菊 あれ又そんな事おつてやりました。
秋 狂氣でとまらさんよ、癪癪とよよ。
重 狂氣でとまらさんよ。お母様とお又様、狂氣がと云

いよーよ。

静子入来

お祖母さんへ狂氣ねえ。

菊 六重様、何んが。

静 狂氣。誰がお祖母さんか。私ふれ。誰か。

菊 御儀居様、お二人が又言合ひておつてやわてんで

をよ。

秋 何んが、菊め。誰か喧嘩や。

静 菊や、お前、私に私とてかたと思ふかえ。

菊 いえ、お母、お顔の色艶は、おつて先とお変はり
ありまさん。

聖のありものを知らざるを
考のありものを知らざるを
考のありものを知らざるを
考のありものを知らざるを

考のありものを知らざるを
考のありものを知らざるを
考のありものを知らざるを
考のありものを知らざるを

金 何に聞かばいと。

言 はい、お少いけぞ。敏捕といふては、か、いふは舞臺と降
矢を致しやうた。

金 お供の事ぢやない、静の事ぢい。

春 まい入来

春 まる、何時帰了、案内はなはれ、そ〜と。

春 唯、今冬よりまた。

言 春様お帰り遊ばせ。

金 静さん、出ておなはん、お前、層氣と申さつて、いんぞ。

春 母様、向きで、おのり、おのり。

金 少〜、考のありものを知らざるを、狂の程、世に恐い、わが、わい
わい。

春 如何もし、自分、狂氣、ではないと思やう、智者、**狂**

人、悪魔、なら、癒せ、い、の、事、聞、て、長、ま、た。

言 御陰居様の、や、は、お、狂、入、さん、は、長、ま、た、の、後、目、が、私

よ、ご、い、お、来、ま、せ、う、ほ、い、い、

金 隊長。手前、の、は、長、ま、た、一、寸、の、威、冒、を、慶、合、り

殺、し、て、ま、ら、な、ら、う。春、貴、様、何、時、に、休、暇、と、い、ふ、か。

春 まい、ご、い、ま、さ、な、い、ま、さ、な、い、

金 何に、何時と。

春 私、毎日、だ、つ、休、續、け、居、ら、な、い、が、月、日、と、い、い、カ

は、身、を、平、相、圖、な、ら、な、い、と、得、ま、さ、ぬ。

金 何時と、い、ふ、う。

春 四五日、ご、い、ま、さ、な、い、

此れ、月中、ま、白、ら
云、也
名、評

同日 同卸を于居間ノ場

巻子 八重子

八重子、いふに、私独りの置居に、さしづの御返辞申されば、
ばはのよまぬか。

是 失刻より痛きりして申す、毎日の一度見ても、識らまぬ他
人の家へ、行つたが、あつた女子の不祥。それば此縁談謝
終つたこと、其れを今日切り、其れが独身で居る中、明
日の明日日、明日日、今日やうな事、縁を切らぬ
こと。其れは、さうに故障が、さうなば、花の盛時、待
候して、又の年、日に、海、さうな事、あつた女子と

さうな事、前と、いふ、さうな事、其れは、申す問、出来、
申す、何、さうな事、あつた、無理に、さうな事、いふ、さうな
事、根え、さうな事、いふ、其れは、春の日に、夫と、添つて
遠く、置、待、さうな事、櫻。十指、さうな事、命、さうな
事、折らむ、人様、此、さうな事、あつた、いふ、さうな
事、花、さうな事、夫と、易、さうな事、思、さうな事、あつた、風、有、勝、は
せ。人の思、陸、車、に、さうな事、秋、風、さうな事、改、さうな事、つ、さうな事、あ、さうな
事、は、さうな事、不、算、に、思、さうな事、い、さうな事、さうな事、此、さうな事、又、さうな事、か、さうな事、縁
が、あ、さうな事、時、さうな事、後、さうな事、方、さうな事、勿、論、さうな事、あ、さうな事、他、さうな事、人、の、口、端、に、さうな事、言、
あ、さうな事、り、よ、強、さうな事、者、よ、さうな事、罵、さうな事、ら、さうな事、と、知、れ、さうな事、と、其、さうな事、れ、さうな事、我、等、
さうな事、が、は、所、縁、さうな事、さうな事、山、家、の、御、先、祖、様、を、初、め、母、上
や、老、先、長、き、其、等、さうな事、等、に、さうな事、同、さうな事、下、さうな事、事、さうな事、目、と、思、さうな事、い、

斯様の事柄、今直に
たかく見受けられぬ
免るも日本人の恥
おろすに従つて普同受
け要るかも。

くと思はば味(えぬ)ぞ。こゝに能く思案して、何
も御評として置かん。固より我等夫婦の者も、其(ま)が
生一度の晴れの筈に、世間の前(ま)の義理(ぎり)を以て、清浄信
様に致(いた)せしめて、面目(めんもく)持(も)てゝの相談(さだま)なれば、向(む)ふの事
とらりし、百子(ひゃくし)迄(いた)る間合(ま)合、底(そこ)の底(そこ)も尋(たず)ねて、言(こと)
難(たが)い、為(な)果(は)とて今日(けふ)、お断(ことわ)り申(ま)さしては、入(い)り義理(ぎり)を、此(こ)世
にありしとて思(おも)はれぬや、強(たか)く為(な)果(は)せぬが、ちよとよ。あ、
我等の公(こう)事(じ)も、之(これ)を思(おも)ひつらねば。奴(やつ)は、ちよの此(こ)身
や、又(また)も早(はや)く見(み)難(たが)い、頼(たの)み綱(つな)の底(そこ)久(く)敷(し)に、こゝ十
年(じゅうねん)ぐし、由(よし)同胞(どうぱう)と多人(たひん)数(かず)の御(ご)厄(やく)人(にん)、此(こ)時(とき)に、
根(ね)無(な)草(くさ)と同(どう)様(やう)と、くよと日(ひ)をば暮(く)す一(ひと)片(ぺ)間(ま)、女
様(やう)とある御(ご)病(びやう)氣(き)、を派(は)は、こゝの妹(いへ)弟(てい)も、いど、氣(き)疎(そ)

げに見(み)做(し)され、頼(たの)み間(ま)ぬぬ身(み)の不(ふ)徳(とく)。宿(しゆく)せせき、
因果(いんぐわ)の知(ち)らぬが、親(おや)同胞(どうぱう)神(かみ)の辨(わ)り、見(み)捨(す)てられ、極(ごく)重(じゆう)悪(あく)
人(にん)、いらそ死(し)んで未(いま)来(らい)が未(いま)知(ち)り、三(さん)念(ねん)の川(か)渡(わ)りに漂(た)ぶちか、今(いま)より
増(ま)してありか。あ、早(はや)く

ハ、あ、早(はや)く死(し)に、こゝに置(お)か
何(なに)と其(その)言(こと)が、よれ其(その)言(こと)な、今(いま)に直(ちか)きに好(この)いお、昏(こ)ろ
きんと持(も)つ、嬉(うれ)しから、其(その)願(ねが)わえ。然(しか)し決(けつ)して、生(な)ま
さふ通(と)り、お母(はは)様(やう)の春(はる)まに、此(こ)事(じ)を、こゝに、おまゐり。天(あま)
へ上(あ)る程(ほど)嬉(うれ)しい事(こと)が、ありが、諍(しやう)の其(その)れを、温(ぬ)る廻(ま)り合(あ)ひ
通(と)り、さう、我(われ)人の物(もの)の、大(おほ)い、成(な)り、お前(まへ)お饒(た)言(こと)て
へ、今(いま)も、風(かぜ)を、端(は)折(お)れ、及(およ)び、哀(あは)れ、目(め)に、逢(あ)は、さ、よ
あ、例(れい)が、お、御(ご)病(びやう)人(にん)の、利(り)根(こん)第一(だいいち)の、身(み)は、お、海(うみ)に、お、

げり。然し言葉と短いはけに、承知の意味と深げ
な法谷子。

金 天か此事知らせつたば、明日の夕方より結納と半
藏持て来る事。其八から管司長持横井針箱
簪世市衣袋の凡そ預算見らるる見らるる。
ふみの音は、例の喧嘩の但し又、女子のはいと見え
との聞らるる毛筋は入る程の隙間にあつた申せば、
八重さかしくつたか知れさ。其さ早へ行つて見の
れ。

元 多分喧嘩でござるが、何時にならばいづれか様
にござる。

〔幕〕

第七幕

小山邸敷の場

静子入來

静 可愛我子と親母め、親と母めと子と稀な。

げやげに誠な手濁江に、澄まご命代送り居る人
の上と推量は、夢の中間に生來し、昔末の露路の拂
はれて、何處にきし身の行か、賞末はと現し、命
のみと有りて、明日と知らるるよ。叔父賞末は
き現せば、斯く一間の内に隔らん、日々まら月
へ行けば、昔末の眠る夜中に、外面にそよめく風の
便はらるる、お八重春年に、思ひ胸と知らず縁な。

余は夏や、た、可怖の。今に夏は、取残のよと
 と擲取らむとて来らるぞ。其れは、今に間に早ら
 八重、此處まで除けり。よれ其方と此方のさふ事分らぬ
 空子、よ、裏へや、残らま心奪なれ。か。八重、何んかま
 居、早らぬと其美しい顔の事、皆、願
 せ、ぞよ。た、其頬と傳は、涙の心に早ら
 せんせらま、伴い、暫、早らぬ、早らぬ
 八重、眼、涙、ま、か、に、嵐、の、嘲、の、お根、を、
 せ、い、た、ま、も、と、母、様。
 静、あ、れ、狙、来、ら、ぬ。早、ら、ぬ、親、馬、の、お、交、の、下、に、隠、ら、
 れ。

是子入来

あ、入、日、さ、ら、綾、錦、の、豊、満、雲、の、美、い、つ、と、あ、の、を、
 ら、思、雲、の、何、故、懐、い、ら、ぬ。か、み、一、天、地、が、思、装、束、
 着、ら、れ、ら、ぬ、樹、鬱、陶、一、成、果、と、ま、ま、よ、一、見、の、
 物、一、眼、皆、思、ら、ぬ、ら、つ、て、一、葉、に、一、世、葉、替、
 せ、ら、ぬ、死、人、に、死、人、一、絶、の、間、な、き、前、表、と、な、り、
 て、未、來、永、劫、續、け、ら、ぬ。
 是、母、様、如、何、に、樂、い、ら、ぬ、苦、い、ら、ぬ、善、い、ら、ぬ、悪、い、ら、ぬ、好、
 くない、好、い、ら、ぬ、満、ち、ら、ぬ、不、満、ち、ら、ぬ、さ、ら、ぬ、清、い、
 清、くない、清、い、ら、ぬ、汚、ら、ぬ、口、は、さ、ら、ぬ、た、げ、た、は、な、き、
 十、七、の、お、れ、り、此、度、申、ま、し、入、と、誰、か、一、方、に、お、れ、ら、ぬ、か、
 十、七、の、お、れ、り、大、勢、屋、に、お、れ、り、入、ら、ぬ、お、れ、ら、ぬ、か、
 静、其、方、の、口、は、さ、ら、ぬ、一、日、夜、毎、人、様、の、心、を、如、く、一、方、

此の如き形神者、
 余の如き形神者、
 到る此静子を狂人の
 むと得ず、矢張、
 子八重子華、向く十
 世、
 此の如き形神者、
 余の如き形神者、
 到る此静子を狂人の
 むと得ず、矢張、
 子八重子華、向く十
 世、
 此の如き形神者、
 余の如き形神者、
 到る此静子を狂人の
 むと得ず、矢張、
 子八重子華、向く十
 世、

此の如き形神者、
 余の如き形神者、
 到る此静子を狂人の
 むと得ず、矢張、
 子八重子華、向く十
 世、

此の如き形神者、
 余の如き形神者、
 到る此静子を狂人の
 むと得ず、矢張、
 子八重子華、向く十
 世、

此の如き形神者、
 余の如き形神者、
 到る此静子を狂人の
 むと得ず、矢張、
 子八重子華、向く十
 世、

此の如き形神者、
 余の如き形神者、
 到る此静子を狂人の
 むと得ず、矢張、
 子八重子華、向く十
 世、

此の如き形神者、
 余の如き形神者、
 到る此静子を狂人の
 むと得ず、矢張、
 子八重子華、向く十
 世、

又顔色がまつ、然、此度、男の子が、
 まあ、女の、親、
 け、
 飛、
 筋、
 是、
 報、
 親、

はく困つて病もあればぬかひなし。

音即病氣を知りつゝ、由迄者様と見えぬのち、何れ申事いふ
つゝあつておぼろげなり。

是より癒へどもなり嘆つておぼろげなり。初
ら治療の見えぬ者には、柘杓下葉殿とて、何
下道ら、皆徒然事。其れをいふ、其ら老實は者、
殿様と云われれば、又何れ下れ物とあらざるや、
此頃見たり聞たりも、事、菊の盆に、
様にさへぬら取締つてくれ。

音奥様、ある私と申奇り、申奉行とつらなり、
上、此頃奥南寐れぬ、日増しは身体弱く容子。
若し之れが直らぬ病氣と申らば、下がた成に

細らゆり、れば、此月限りの暇に、殿様に
お願申して下され。

是其ら昔からの鬱別業、其れを吐き出し、病氣と
申せば此處までえ介は療治の出来ぬ。此頃殿様
と申奉行人の出替といふ、天主人、
其ら申事申上らぬ、申夫の常事、
の落度と申す、言ひ、言ひ、
か大い、
實め、様子、
音お目と賞、

「音奥様とて、定子と續いて行かむと
し、途端

春羊入来

定 (独語) 何時もは、何故辱るや、朝から何處へと言
言ひい所せぬ、今日も又、さう辱る来、終りて
りといわ。然し知らぬ、佛(春羊に向い)女様の
お病氣と餘所見して、何時も遊入で居るん
な。

春 先日申、財産の事如何の模様でございませ。

定 其様は事々何時も、話の出来、事、其れより女様の
即病氣の原因知つて。

春 其れに付て今日も、何、さな事々、あな、
定 存知、どぶ、さ、ま、ら、。

定 せんや、替、其、さ、さ、ら、。

春の。

定 今更、そ、な、に、驚、く、ま、ど、白、く、。、さ、ら、程、迄、に、莫、か、ら、せ
し、ま、。、向、つ、疾、つ、り、實、情、の、お、ら、。、さ、ら、驚、か、ま、い、ん、
此、妙、と、い、い、。、狂、氣、と、ま、さ、ら、。

春に、此、私、が、。、は、。、室、に、入、つ、て、お、と、持、つ、。、盗、入、の、た、け、
し、ら、。、何、と、。

定 又、利、口、ぶ、つ、て、。、其、木、が、。、と、盗、入、の、三、手、と、。、ど、ん、に、
女、様、と、お、苦、め、は、れ、。、居、ら、。、知、ら、ま、い、が、。

春 何、と、い、い、ま、ら、。、解、け、ぬ、謎、と、い、い、ま、ら、。

定 謎、。、あ、。、ま、ま、。、謎、と、い、い、ま、ら、。、然、し、此、胸、と
聞、い、ま、ら、。、さ、ら、。、は、。

春 妾、が、何、と、い、い、ま、ら、。

明見の思はれど、其れを却らずの才が結句直つたといふ、
言ふの思ふと思はれど、こゝに分ける時直つて見計らひ人
に知らぬが、まゝ居間へ。詳しき事を見折た。
春の人は事、お氣障は事。あゝ何の譯の皆右に結句の事
ばかり、何を此處で承らねば氣がとまらば、愈事よ、事
と出来ませぬ。

疾
この其事柄が嬉しむる、面をい事なり、躍る胸を押しこ
こ言はれど、まゝやうな心弱し者なり、前以て勇氣をこけ、
度胸と据えねば得言はぬ事。三時間の猶預と其方
に願ふも、餘義はい次第、その其れと少し候てくれ
よ。まゝ春事、此様は事百々承知の其方なれど、人と壁に
ば書ふ筆をよて、身にたゞ誰とば知り難いといひ、日頃如

才の賢い性質の良方なれど、流石に事のうらぬだけ、世
事も春は其の上、指得孰れと言はれぬが、いで言ふ
容子が見えて、口を何の得言はぬ。たゞ偶ま打解けて心
地よげに談つゝ様、物越しの見まらぬ、ま間は、彼が吹
風と同下様、對きと構はぬ其言振りの。まづ君子が、賢
人がどう、血のまゝにとて腹言らぬ、見ごとと思ふが人の情。其
と知つて知らぬが、善悪醜美と良の儀、言ふて除かぬ其
方の癖、いふて天會の癖もあら、世間を知らぬ海が、こゝ
其方の心と矢張底と、見透さぬ、泉水の、清きがよまゝ
淨からぬが、口に便りて性質と、汲むと並つて人の常。されば
何時かやうな、些細な機勢に汲み誤りて、まゝな事な
つゝ、聞かぬが、嘘つゝ其方より意外は思ふと、まゝな事

親の魔よ、心とちがつた、本つくと、夕つと、思案
江夫と、極層球の、心と底に徹ら、あ、腹に、情の
露、結ぶと、見、思、外に、思、生、母、悲、な
き、凡、婦、の、ま、懸、終、神、の、十、さ、世、の、雨、吐、い、
け、れ、雲、の、烟、消、魔、空、に、慚、愧、穢、梅、の、声、暫、
と、見、聞、う、こ、い、ら、。

同二 同別室の場

金久 走子

金 きのつ、あ、の、春、年、の、從、順、に、其、さ、ち、言、い、申、聞、い、ん、ん、
い、ら、。

走 はい、初の内、眉と鬚、め、肩と揺動り、ま、と、七、

走、の、嘆、息、も、一、太、息、中、一、出、織、紐、と、い、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、
して、聞、い、て、其、ま、い、ら、が、腹、の、其、等、し、止、り、両、手、を、垂、れ、
目、々、暮、ぐ、り、血、を、と、変、は、り、唯、辰、の、け、り、が、顛、て、か、い、大、石、
子、の、魂、腹、に、影、が、さ、が、前、に、さ、ら、い、て、是、の、ま、い、思、は、
る、様、も、あ、り、い、ら、が、懸、て、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、
み、こ、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、
算、さ、い、て、聞、い、た、は、い、ら、難、が、親、馬、の、呼、ぶ、ま、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、
か、き、動、け、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、
熱、心、の、聞、き、果、は、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、
傾、向、き、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、
け、た、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、
れ、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、い、ら、

鎌倉存子葉別荘庭園の場

仙吉 梅次郎

此位の程度のものやれん
こそ吾人の癖もものも字も
み諺みて學ぶべけれど
果しよるよまをりてん
到着苑と腕がさるも
得ず

此草より場もなれ
ども此所まきまき初め
脳脈を休めこころ
はるゝ女もあま
し中々面

不明

仙 草木に手入れ、種も蒔くおぼなりぬ花がい時と時、若
殿様の御いお坐、毎日梅入の大抵ではないか。

梅 ままた、彼らと噂を廣くして、狭いお庭、三日の手間
で、仕事と楽に出来たわえ。

仙 それがお合切りで仕事もなまらぬ、成程大層手が入つ
もので、心も清くもなつた。又お座にお西人様、お運動
がてらお遊びにお坐せられ、定めしお庭もよななつて
し。

梅 そのや何時もならぬとあり、此度とわかれお庭にお氣
はけぬ御様子。なぬ、仙さんともありつうえ、御り

文章もお罪がたると
喜ぶべし長きよし

違ひないの受け向
さしれず妙

仙 手書の花が美しいと、物と言はば笑ひませぬ。

仙 は、若し若者もなつたが、かゝり奇つて、美しく
星のやにまら、其花のうがいつて罪がなつて眺
がよいつて。

梅 は、小供のうはとこは入るが、今此牡丹の我の影から、
おんば腰越の傳を衛さんのお内儀さんのおいせ、おた
ふたにせよ、若しあつて飛ぶ、枯木のお前さんご
て、花咲く、見れから、此花より二倍と三倍と
美しい、物言ふ花をきて居つちつ、血がが、居
る若殿様、お氣が移つて無理がなつて。

仙 信じて、時に梅さん、奥からつて、お菓子があつたから、お茶
と入れて、味に來つたが、おい、わい、休息がなつた。

の并つておちるにたつちもなご、其れを世人の者おこし、
ぬきおとす、い、え、な、ま、ま、ぬ、と、申、一、次第、
又、お、嬢、様、よ、就、い、て、お、な、ご、の、直、に、御、口、に、お、つ、け、
直、に、お、つ、け、は、何、ん、な、ご、の、御、口、に、お、つ、け、
お、根、を、申、一、ま、ぬ、。

其、手、頃、に、波、風、を、透、し、て、世、渡、り、一、お、前、
け、つ、着、い、ま、し、我、等、が、い、ち、中、知、つ、て、是、れ、が、
彼、う、つ、此、う、つ、都、合、の、お、い、作、事、
思、は、れ、わ、ば、い、ま、な、ご、の、御、口、に、お、つ、け、
お、根、を、申、一、ま、ぬ、。

奥、様、其、れ、を、直、に、思、召、す、一、直、に、道、を、
お、人、
お、い、何、の、言、所、と、な、し、思、は、れ、わ、ば、い、ま、
都、合、は、お、い、ま、ぬ、。

が、直、に、お、ち、る、に、た、つ、ち、も、な、ご、
世、間、に、お、ち、る、に、た、つ、ち、も、な、ご、

其、時、に、其、れ、を、持、つ、一、箱、の、葉、の、お、い、な、
お、い、ま、な、ご、の、御、口、に、お、つ、け、
頭、の、召、使、を、お、い、ま、ぬ、。

頭、の、召、使、を、お、い、ま、ぬ、
直、に、お、ち、る、に、た、つ、ち、も、な、ご、
直、に、お、ち、る、に、た、つ、ち、も、な、ご、
直、に、お、ち、る、に、た、つ、ち、も、な、ご、

お、い、ま、な、ご、の、御、口、に、お、つ、け、
お、い、ま、な、ご、の、御、口、に、お、つ、け、
お、い、ま、な、ご、の、御、口、に、お、つ、け、
お、い、ま、な、ご、の、御、口、に、お、つ、け、

又わ。

女 何と云陰氣は暖から。

言 此即隱居様と云遊ばせり。

女 又はら敷(よ)まが、お苗(い)ん(ま)の信(ま)奇(ま)て下(ま)は(ま)な

はけ(ま)の、ま(ま)即(ま)隱(ま)居(ま)様(ま)お(ま)然(ま)ま(ま)は(ま)た(ま)ん(ま)と。

言 是。

持(ま)つ(ま)来(ま)い(ま)お(ま)手(ま)紙(ま)用(ま)向(ま)ま(ま)多(ま)分(ま)其(ま)事(ま)い(ま)ふ(ま)の(ま)と(ま)ら(ま)ぬ(ま)由

即(ま)様(ま)と(ま)最(ま)早(ま)即(ま)存(ま)知(ま)の(ま)事(ま)で(ま)が(ま)い(ま)は(ま)ら(ま)ぬ。

言 是(ま)の(ま)真(ま)実(ま)即(ま)隱(ま)居(ま)様(ま)と(ま)お(ま)思(ま)い(ま)一(ま)事(ま)と(ま)徒(ま)と(ま)な(ま)り

言 是。

第一

言 い(ま)お(ま)疾(ま)に(ま)お(ま)暇(ま)と(ま)顔(ま)居(ま)る(ま)に(ま)お(ま)許(ま)は(ま)り(ま)た(ま)ら(ま)か

く(ま)今(ま)迄(ま)居(ま)る(ま)が(ま)ま(ま)う(ま)そ(ま)間(ま)い(ま)ち(ま)暫(ま)し(ま)否(ま)許(ま)ら(ま)ぬ

が(ま)許(ま)は(ま)ら(ま)ぬ(ま)が(ま)明(ま)日(ま)お(ま)田(ま)吉(ま)の(ま)社(ま)に(ま)お(ま)こ(ま)も(ま)。

女 松(ま)い(ま)ん(ま)と(ま)置(ま)出(ま)の(ま)ま(ま)う(ま)女(ま)彦(ま)甲(ま)斐(ま)の(ま)ま(ま)な(ま)ぬ。

女 是(ま)は(ま)ら(ま)都(ま)合(ま)三(ま)人(ま)で(ま)。

言 是(ま)の(ま)ま(ま)う(ま)即(ま)隱(ま)居(ま)様(ま)何(ま)故(ま)お(ま)許(ま)は(ま)ら(ま)ぬ(ま)と(ま)い(ま)ふ(ま)。

女 是(ま)の(ま)ま(ま)う(ま)理(ま)は(ま)ら(ま)ぬ(ま)詳(ま)し(ま)事(ま)お(ま)懸(ま)念(ま)は(ま)ら(ま)ぬ(ま)と(ま)い(ま)ふ(ま)。

言 是(ま)の(ま)ま(ま)う(ま)。

言 幼(ま)い(ま)時(ま)を(ま)思(ま)は(ま)ら(ま)ぬ(ま)ま(ま)う(ま)後(ま)を(ま)狂(ま)は(ま)せ(ま)し(ま)子(ま)を(ま)親(ま)何

の(ま)責(ま)何(ま)の(ま)名(ま)譽(ま)い(ま)や(ま)い(ま)し(ま)そ(ま)確(ま)々(ま)と(ま)悲(ま)ば(ま)り(ま)が(ま)來(ま)ら(ま)ぬ(ま)と(ま)い(ま)ふ(ま)。

言 是(ま)の(ま)ま(ま)う(ま)一(ま)切(ま)知(ま)ら(ま)ぬ(ま)地(ま)獄(ま)の(ま)使(ま)り(ま)の(ま)情(ま)事(ま)。

下(ま)女(ま)に(ま)お(ま)ら(ま)ぬ(ま)も(ま)ら(ま)ぬ(ま)と(ま)い(ま)ふ(ま)。

我其美哉とて問及ばねど。

言いや〜確うた。

菊 今宵や最なかな時分。ふあゝあゝは。

我 何に動く物も。あゝも裏して顫てりません、往き

ませう。

菊 私〜。

「と二人さま〜。」

言 今ら心と何も持ちまぬ言、何と可怖〜と思ふべき。

「と歩く行く、庭の邊の奥に

春まを居よ

や、おき〜ら、春様でござんてぬか。

春 望月のかく見ると耻が給ふと、不孝の兒はねばこそ。

すはれ

春 春様〜即返辞遊ばせ、言丁ござんせ。

春 言。

言 何〜言ひなげは、^{お前}願、聞いて

と存ドヤ〜に、此處にたつ〜やわ〜とは。そんねら先^{おの}から

此處に。

春 いゝえ今〜や。

言 何と土間手遊ばせんで〜たり、あゝ

春 いゝ何と。然〜言ひ、何々言ひげは、^{お前}願、聞いて

満々〜は、いけが、今宵の石まき由御慮に、酒さ〜甚ら

戴き〜も、頭々盤石も、壓さ〜、如く、胸々生爪と

て扱き〜、〜、や〜心也。ナ、持薬、何々飲ん〜が、

いゝな妙薬とて、斯〜折は、此清〜新〜まき空氣に

及ばぬや。さういふ暫くの間は、如何に大事に用が
ありさういふ堪忍さういふ。木と語かけて一層苦さはさう
と思ふなら、何れの間も、言いつて。

音 滅相は決して明日の日はよきと、そんなら黙
てきで斯う言ひなす。

春 いや、今夜に限り人に觸らさういふ刺さういふ痛
い。胸押入で肩揉み入でぬい、痛い、音の、苦
しさに氣さう。

音 あいどう鼓をさういふ冷水を持つて来りなす。お返
者様ごぞい。

春 斯う問答さういふ何れ苦い事、許さういふ音の、明日早
朝に急ぐ程に。

音 明日の本嬢様と御一緒に、右前にお伴申す度、悟下
さういふ。さういふさういふ、此お手紙お渡

し申す、王子——ある王子から來る人のお頼み、さう
いふ様からと尋ねて来た、お明女の方からさういふさういふ。

春 左様ういふ様へ来て、明日はれば何處まで行きませ
う、お様さういふさういふ言ひておつかういふか、直か
らさういふ、日にお疾はさういふ前。

音 そんなら春様。
春 早く行きな

「音」おさういふ。

さはん、日月照さぬ闇のせの、おむらさういふ儘に此五体と、捧
が終りて魂と化し、道を行きて真心に、汚れぬありは

一つと照世貫はんに

「此時植父の夏もまかり」

言又五也り来い

音 道冥にお一人で大丈夫でぶがひまにら。

春 あ、真ちま奇いせい、なうらなうらな。

音 只今彼うで躑きまらるる、一層お勝手へ行くらな
らかりまら。

春 其わて身寄いせい。然、朦朧として毒氣籠れらる
な夜に、然ら斯ら枝ざりの好い並木の周邊に長居
ら大毒、若一の瘡にもらるる知れぬすと。目く狂ひ
て寐わ。

音 はい、らんならあはく様と道た。おの彼へ鳴らるら

月夜鴉でぶがひまにら。

春 萬里人南去、三春雁北飛、不知何歲月、

得與汝同帰。

「と微吟せら」

音 何んがぶがひまに。

春 孤雁が鳴いて行くのじり。

音 は、子が鳴いて居まら、あ、輝様がさう聞えよ
ら。

春 輝が。左様〜さう聞え、其れおひらへ前に
お帰り。

音 折と思ふ。らんから春様明朝お目にかりませ。

音 然ら音、真にお然らばく。あ、春は山家。

音 然ら音、真にお然らばく。あ、春は山家。

にせよはき初めはより、まじりて子にいらしむまれば愛せら
れはかり、露塵に其思報せざるのみ、今はその際によつて
言ひて、無情なれば、永き別を取らざるぞ愛す。定
めて知らざるに訣別、我は後に恨むらんが、然ればと
て、別れ一時に教はらば、泪に劍溺はなす。之
と思はばこそ、言ひ、我は恨と思ふなよ、又思知ら
まじと思ふなよ。彼に雲に翻り、泪に潜む身類、獸
類にた、受け思はば知らば、さて況や春年、人
倫に生と得、はらふ思と知らざる理あり、はらふ報
恩と思はばこそ。唯運命はまじり、果てて、結らば
子行の悲涙を胸に唾き、空しく今宵の露と消え
せよ、沙波の遺恨、眞途の悲嘆、思はばこそ。

思はば春年六歳の冬、父君に別れ、よひ、黄香の
孝と聞けり、とて、猶朝夕心の中に御侍養意とては
く、唯一人と頼り奉る女君の御真福を祈り、日な
く、只管に行と積り、たゞと勵み、暇あれば我等と柳に、寄
かたき御身と反上るに嘆かせ、女様の御越し、より
行末の御心の中、推量のなきに、降り類き、泪を袂
に包み、愈々身と道と行ひ、女君御君と初め言
ひ、また右と申す、はらふ思ふ、想ひも馳らせ、思慮
謹慎と云き、はらふ思ふ。人々多く誤れ、礎に思考
と構ひ、之れより得意顔に周旋眺む者こそ、おろ
かり、我は、今こそかかるといふ。さりながら
我は、同じ、老と懐き、神はら女身、とて、誰か預め計り

事の母様とは昔も狂はし、妍君とは氣鬱せし
むに事おもひ思ひ知りてぞ。思ひたはしは懐せしはまた下
二冠、母様と狂はし妍君と昔もゆきも承れば何氣は
く油繪生つる折に非ざりしつゝ、今迄そよりの知りて
只言に、氣鬱せし程駭れし、彼折の思ひたはしは懐せしはまた下
懐せしはまた下思ひたはしは懐せしはまた下。あはれ
し母様と何處に御座し、せめて其の角だに聞えら
ぬならしよ。やお顔と持せしは、其のま向ひ斯く既
に伏持し、杖を執りてみよまのそと、盗人根性ある者
か、子でよはし親でなはい、あかめ他人に居所決て教へ
しごと、おはし母か、いりもてとて、誰のそり教へて
者なはし。の東西南北天のせり、何入つりて行くはし

ぢりぬ、えんが今ほの心も迷、何處向ひしは母様のお心
おめくろくぞ、かくそよふ風まら舞もぬを、感の聞より
闇へ迷へし、是も此身の前非り。待て、まらばかり闇夜
に夢をさふがあり、夢を何時と春年は、樂く嬉し
く母様と、眠む遊ぶが常なは、羞むひやりの風み心地
に、此肉待の難なは、いらい悲しい種時を、そよと音は
風の音に、皆忘昔とせりかはし、樂き何時と快は、眠
り居らし、美妝童と、我れ一語に居らる。いやく
羞むの來し、けし母様來さざりて、見し知らぬ女神「いやく」
羞む來給はし、今より思憎せり、垂々何日かは貫
むも、貫ぬな勉めあはし眠らし、甚い心と起し
む、貫東はまかな、何んせし。ま、何んせしと悪

此所の死を免る人
同敷の死もおもひ
ずあまき寄るべき
由けらの死の如

全 何んが何が早いか。
我も嬢様とおもひんも衆は死んで居ました。
皆、わ、

全 早へ三吉、菊、早へ一銭。

定 何へんぞおぼがはせし。
「三人行く。」

三吉西まへへ會子と、菊と我とは音と泉と
入來し

三 おもひ斯く冷たい汗流して、僅う十分とまぬ前にお二人
運ばせりし、その地獄の墮ちて火の車幸き廻はし
此脈折し、ははははがぬいおえ。
二人も何へんぞおぼがはせし。早へ水と

「早へ菊、水と二人の顔に振かけて入拍も、
音息と吹ぬし。

定 音息と吹ぬし。

音 女、私をよみ死切れおもぬか、何とてお後生苦しい。

全 其れへ音とまへへ氣絶せし、氣を丹毒とせし

音 音、全体が。

音 息のあつ内申、おもひが、私お禰と明けたが早いら中よ
物の外へ音、驚き申、駈父おば、おれと嬢様。
起しておあげ申さんとお作動は、早あつしよ、春
さんと御せられ、おもひ、動らぬは、お、後を妻か
地、何と存ぞおぬ。

全 音、おれとおれおぢ、音。

此所作者ともあま
ふかくし難くとも
ひる路あり

儼として堪へしめり、義理ある妹と母親と、無慙
な最右と遂げさせ、此處久と恨むのみ。

定に、五人やうの女様は、是れをさす。此定が不孝なほ
かりに。女様當世の最、問答も、不孝の罪が積
りに積りて此身一に重き天の責、死人がお詫び致し
たまはば

「と自害すはまはせしむ。

まぬ、おん、折角の問答、望月と人の業を
血の雨降らし、又々最右をさす。庭り天道知らぬ仕
業。

危所詮此に遺す。毒水こいしめ、物廣き世見に、女尺
の此處久の軀は、外に、定何と其るが

知らしぞ、愚かな真似させぬぞ。とあし支と
殿、想と懸る。八重櫻散らし、嵐と存分に、怒り
嘲り蹴らし、斬らり、心在る早しなれよ。

「とさし俯向き驚く。

先、斯くはありとは思はねど、お八重殿の御事
に付承り度事ありと、山村の遺り、上封に、裁判所
傍梅の屋敷と、秘密の間を積りて、書い置
りしと、疵持いに取書し、急轉せしもの妙評のよんわ
小山は、何う問原ありと、思ふ儘此處へ来て
見れば、斯く始まらぬとは。思ひつりし心を、最右
の裁判官、常々居ぬし、首つて、油断とたまはば此
の通り、思はし猶恐し、此心ありわえ。

換音股体と云はれし文人の耻辱ありしをすれば本篇を以てテ
このスト、キングリヤの二篇より胚胎たりし子とて作られ尊
と城せざるべし。既に尊を伊勢のトラスと云ふ人物と
まじり作者の手子なりしこと。又ドラママシキと云ふ母と出でたる女子
於ては湖底を幻と云ふも異なりしことな。此二篇の人物
を併し是れ小づし文章の良き於て月中子と兼ふるべし。解
がれし御座りれば其味淡白なり。清み島。世同云々けとて
仰せざるありし前考ありしなり。

本篇に於て不必要と云はるるは依山と云ふ華族なること
小山と云ふ臣なること下女が四人あること等依山と華族なる事
この極かろし下女一人ありしことなり。
~~結核~~ 本篇の結構凡て反對のたままなり成るるなり

如し一層一層原因と説かずして結果と見せ玉を推して
客を罵る。本を見せしめて枝葉を描く依山家がい
かきこまらるゝかと説かず。小山の要計のつかひるかを説かず
又千葉と八重子の相立の幕しとと極本を著れりと傳へし
三影と罵らるゝか妙き。全を備へて此手段を以て女人遊するに
如しされど主なる出書ハ大概不^たと云ふく淡淡のうちに紙
らるるれじいかに辨子が死せるやいか子千葉と八重子が不^たを
いありか讀者も更に知るべき能はず。最も不思議なること
全久とて全久も本篇の主動者なりべしかる。吾人なる
かと思はるることも必要なり。作者も此は定子の口をかりて吹
あなむ此言付くことし。ゆゑにたう^たなり。全子^たもい
はれり如く見ゆ新ゆり矣がなくして女をも迷境獨説

と云ふならかり事なり影を四つと本を記さるるも
一の方にはおまほなきし事なり是れ吾れなり正別ありて
神子吾れあり故に事も妙しと云ふはれと吾れありて
困りものありあやむ

月中のみさく巴里以升の人物を描きたりと云はれん此れ
も目事なりと云ふ二人ともなき人物、即ち月夜~~の~~吾れ
人物なり一、月夜吾れの人物三人あるなり一、即ち金文定
子伴裁太郎~~の~~人なりとお静、八重、寿年又一人なり
及び下女の富之を加へ三人と云ふ形と云ふはれん
ず、開き止むと云ふこと、此れ作者の人物を多く描
き、小詩人たる事なりと云ふはれん是れ月中子の持論なり
平凡の人物を描くは作者の見識を著すことありあやむ

此れと云ふならんは作中の人物の性格をいせせられたる
事なり此れと云ふ言葉は華文、金言、佛語、譯
読の錦繡を織りこみ、貴き事あり、意味は僅かだが
の胡椒ある故に華文の貴き事なりと云ふは、意味は
の故に止む事なり、平凡に華文を呼ぶは、
らむ

獨語のみさくこと、一切讀者を度外をたらし、眼を許さ
るること著す考やれども、日本の脚本にあらざる事、
西
洋のドラマチックもあらざる、極端にいへば、ドラマチック價値を毫
まとして断言するは、其らが文學上よりある價
値と有る事、いはずともいへたる、叙情詩なり、本編が
ドラマチックを表現してドラマチック價値なき事、作者がドラマチ

ストニあらざることをいふものなり是れ以て余が評見と
あらざるをいふものなりおと子に自家に長雨と描くは經
二徒方なるもの如く糸水ども叙情詩人として想像の
豊富なる文章に艶柔なる述懐的の文章より巧みなる
下へて技良の具らざるなり余が暴評と非難することなく
ドラマチックと描くは叙情詩の力と同一の終りては文學
自ら款なるなり知れず余が鄙言と容れらるるべし
不也

虚心平心として作中の人物と云ふべきこと悪魔、地獄、女神
等共妙なり其の言葉と使ふは故に多く狂人の如く
おと子にこそこれをお神の姿に作らばらばおと子にせられ
るにせま、おと子狂人の別ありとおと子はなり是れ其れ也

一さ言葉博き語の故に大抵作中の人物は性情を
知る能はずと遺恨ありといふなり余又も文才尚な
る若し世の人たるは其の見えることなくお神素も著し
唯氣のちいさなり人物たる丹見あるなり
以上もまたおと子余の評として到底月中子を満足
す能はずと自らいふは懐疑なり糸水が作らるる余が俗見
の批評の能くも其をすくなく乙平に批評せられたる
高きに度し許し終るる本編の二大句と知らるるは
亦く不也

不也









